

あとがき——これからの色々な夢——

本書は、月刊『歴史研究』に連載した九章と補論（新稿）および付録（『産大法学』定年退職記念号に所載の略歴・著作目録）などから成る。わが人生七十年の歩み、多様な人々との出会いなどについて、まだ書いておきたいことは沢山あるが、簡潔を旨として、ひとまず筆を擱く。ただ「あとがき」に代えて、これから先の淡い色々な夢を少し付け加えておこう。

まず研究者として、私自身で成し遂げるべきことがある。その一つは、上横手雅敬先生の御推薦により機会を与えられたミネルヴァ書房の人物評伝選『源高明』の執筆である。早くから「光源氏」のモデルと目されている高明（914～982）は、醍醐源氏として異母弟の朱雀・村上両天皇に仕え、左大臣まで登りながら、安和二年（969）大宰権帥に左遷された悲劇の貴公子である。しかし、その実像を直接立証できる材料は僅かしかない。そこで、周辺人物との関わりも交えて、七十年近い生涯を可能な限り明らかにしたい。

もう一つは、この源高明が著わした宮廷儀式書『西宮記』テキストのデジタル化である。土田直鎮先生の御依頼により前田家尊経閣文庫所蔵の大永鈔本を底本に校訂した神道大系

編纂会本は、短期間に仕上げざるをえなかったもので、不備があり誤植も少なくない。それゆえ、あらためて改訂本を作らねばと思っていたところ、金沢工業高等専門学校教諭の野木邦夫氏が、全面的な協力を申し出てくれたので、宮内庁書陵部所蔵の壬生本を底本とした電子版の作成を進めている。

ついで研究仲間たちと共にやりとげたいことがある。その一つは、同志社大学の竹居明男教授ら数名と進めてきた『三代御記逸文集成』の月例輪読会を続ける。そして、その研究成果（校訂・注解）を雑誌『藝林』に順次掲載する。

もう一つは、京都産業大学の日本文化研究所で集めてきた賀茂関係資料を中心に宮廷と勅祭社の関係を説明する特定課題研究チームに客員研究員として例会に参加する。そして特に貴重な絵巻を詞書解説なども加え、図書館のデジタル・アーカイブスで公開していく。

いま一つは、今春から勤務することになるモラロジー研究所の道徳科学研究センター教授（研究主幹）および廣池学園・麗澤大学の比較文明文化研究センター客員教授として、共同研究に参画する。両センターは壮大な理想と目標を掲げているが、私は廣池千九郎研究室の橋本富太郎研究員らと共に、皇室伝統・宮廷文化の史的研究に取り組む。

その一端として「皇室関係資料文庫」（仮称）を形作りたい。これは、同研究所・同大学の既存図書・資料をベースにして、盟友高橋紘氏の旧蔵書や私の収集本および篤志家達からの寄贈・寄託品等を加えながら、それらを順次整理して和英両語の資料目録を作り、国内外の研究者などによって活用される「知の泉」にできれば、と念じている。

さらに教育者として、今春から「御礼奉公」をしなければならぬ。その一つは、最初に九年間勤めた皇學館大学の特別招聘教授として、年数回、同大学の学生や社会人に「神宮と皇室」への理解を深めてもらう講義・講座などに出向くことである。また同大学学事顧問の田中卓元学長が発案され指導してこられた六国史（特に『続日本紀』編年史料）の大事業にも、史料編纂所の研究嘱託として、引き続き協力する。

もう一つは、丸三十一年間勤めた京都産業大学で非常勤講師として、一般教育のリレー講義「京都の伝統文化」「賀茂文化を学ぶ」「ふるさと論」を分担する。

これ以外にも、従来いろいろお世話になった団体や有志などから、ボランティアとして出

講するよう求められている。それもありがたいことで、都合のつく限り応じなければならぬが、私の本分は歴史の研究にあり、その成果を論文や著書として学界・言論界に公表することに力を注ぎたい。

なお、家庭人としての私は、文句なく落第である。四十三年前（昭和44年4月4日）に結婚して以来、母親や子供の世話も近所や親戚との付き合いも、ほとんど妻の京子が引き受けてくれた。そのおかげで存分に研究も教育も続けて来られたのだ、と今さらながらしみしみと思う。しかも、家事の傍ら研究を続け、岐阜聖徳学園の短大・大学に二十年余り勤め、五年前（平成19年7月10日）に九十一歳の天寿を全うした母の介護に十年以上も尽くしてくれた姉さん女房には、関白亭主といえども頭こぶを垂れるほかない。

このつれあいに似て育った一人娘の久代は、十四年前（平成10年5月5日）に結婚して、娘婿（私と同じ功。彼の妹も妻と同じ京子という）が勤務する神奈川県の小田原市にいる。その家族が（孫娘二人も）老境の私共を気遣い、しきりに近くへ来いと勧めてくれる。それは嬉しいが、生まれ育った郷里ふるさとを離れるのは辛い。思案の末、どこにいても同じ日本の中だと肚はらを決め、岐阜の家はそのまま残して、今春から小田原（国府津）へ移り住む。

小田原は二宮尊徳の生地であり報徳記念館がある。そこに事務局を置く国際二宮尊徳思想学会（現会長は並松信久京都産業大学教授）との縁にも恵まれているので、「報徳」思想の勉強もしたいと思っている。

この新居から、毎週、モラロジー研究所へ通い、また毎月、京都の研究会に出かける。さらに年何回か予測できないが、有意義な会合などでボランティアを務める。そのためにも、家内・ドクターの忠告に耳を傾けて、健康の維持に努めよう。

後になったが、三十数年前から親交を重ねてきた吉成勇氏（歴史研究会主幹）は、私の我侷を快く受け容れ、拙稿を月刊『歴史研究』に連載の上、本書を纏めて下さった。また乱雑な手稿をワープロ入力してくれたのは、川田敬一君（大学院での研究指導生）と岩田享氏（法学部の社会人聴講生）、および付載した略歴と著作目録を入力してくれたのは、古藤真平氏（國書逸文研究会の学友）と周藤忠明君（大学院の受講生）である。併せて感謝の意を表する。

平成二十四年（2012）壬辰二月二十五日（普公祭）

所 功